

批評と紹介

西北第二民族学院・上海古籍出版社・

英国国家図書館編

英蔵黒水城文獻②③④

西田 龍雄

第一巻の書評紹介を書いたあと、二巻三巻四巻と三冊が矢継早に二〇〇五年の中に刊行された。今回も編集方針は全く変つておらず、第一巻と同様に内容をよく把握することなく経典断片などの安易な指定を与えているのは誠に遺憾である。二巻以降は興味のあるやや長い断片も混ざっているの、筆者が理解判断できた範囲で珍なるものなど任意に取上げてみたい。仏典のほか天文曆法・占卜陰陽道など実に多種多様の文献が西夏語で書き残されていたことがわかる。断片のみで全体の分量体裁は不明なものその背景に複雑な西夏国の多元文化があったことには驚かざるを得ない。言うまでもなく、西夏研究の資料としてこのスタ

イン収集品をどのように位置づけ活用できるかは重要課題である。それは最終的には全断片の内容がかなりの程度に判明してそれが西夏文化のどのような面を反映し記録しているのかが解明できての話である。

スタイン収集品は、発掘された年代に少し開きはあるけれども、ロシアのコズロフが収集した大量の西夏文献とは本来同種のものである。たまたま別置されているに過ぎない。それ故相互の關係殊に相補關係を重視しなければならぬ。(一)スタイン収集本のみに含まれていてコズロフ収集品に欠けているもの。(二)両者に同類のテキストがあるがその一方に欠けた個處を他方から補足でき、両者を補い合わせて元の形に復元できるもの、部分的にこの作業が可能な場合が少なくない。(三)両者の間に異同が見られ版本の相違などを発見できるもの、この三点はいずれも両者を比較対照することによって始めて明らかにできる。今回はこの三点を中心にして述べて行きたい。本書は既刊第一巻から第四巻まで単純に番号順に写真を配列しキャプションをつけたものでそれ以上に収集品自体については、全く解説していないが、その線に沿つて多少の議論を進めて行くことにする。その過程において図らずも黒水城文獻と一九一七年に発掘された靈武県出土文献の相違も露見することになる。(西田二〇〇六)

1. 前回の書評では字書『同音』の断片を取り上げてその所属する個處の指摘と前後する連続関係を示し一部を復元した。いま述べた第二の手續にあたる。今回は単語集『雑字』（「三才雑字」）の断片を対象に同様の作業を行つてみたい。筆者の手許にはスタイン本を復元したものとコズロフ本を順序づけた二つの資料がある。

コズロフ本 80816 は乾祐十八年（1187）末年の紀年がつき巻末に「雑字一卷、是ノ雑字ハ宝韻・手鏡ト校訂シ新ニ雕ス」と記される新刻本である。そのほかに数種の刻本があるが、すべて完本ではなく、前後が大きく欠けている。

スタイン本『雑字』は小断片のほかに1833の番号のついた二十六枚（下半が欠いている）が残っていたが、一九七〇年に筆者が英国博物館に滞在調査した際にコズロフ本を基にそれと8922が上下に連結することに気付きほかの小断片も補つて復元したものが現在一冊本として所蔵されている筈である（たぶん巻五に収められる）。当時の補修製本土は確かブルームフィールド氏であったと記憶している。この『雑字』は版心を「雑字」とする蝴蝶装であり、全体で二十六葉あつたことははっきりしているが、二十四葉以降はほとんど残っていない。幸いに紀年があつて大徳丁巳（三年）と読めるから一一三七年の刻本であつた。いまあ

げたコズロフ本よりも古い版本である。コズロフ本との間に見られる明らかな相違点は、例外はあるが、スタイン本には雑字一品上天第一などの小見出しが同じ行に本文中に続けて書き込まれていることである。コズロフ本は唯識二十章の裏面に書かれた2395『三才雑字』（写本）のほかに、小見出し語は別に一行を取つてしかも白抜きで二重の枠や飾りをつけた形で示されている（拙著『西夏王国の言語と文化』岩波書店、一九九七、二八五頁参照）。本書二巻2から四巻4に収められるスタイン本『雑字』はいずれも小断片で直接に連続するわけではないが、つぎの順序に並べることができる（括弧内の数字は原本の丁数を示す）。

②2401上天第一(2a)・2400下地第二(4b)・3031L1~L4
野獸(10b)・3031L5~L7蛆虫昆虫(10b)・3031部姓
(11a)・(左〇)行から右E3に移る)・2402部姓(13a)・1009
雜義(15b)・1005屋舎(18a)・1457飲食(写本)(19a)・
2236-1007上-2920下 日限・官職(19b)・1006-1008官職
(20ab)・3022不詳

スタイン本1843+3922(3b)の最終行に釋釋(虹蜺)の小見出しがあり、版心を介して次の六語が記される。

釋釋虹蜺 婦殺陽氣 翰翰彩縵 穢穢秋卷 □□ 徹飯草
名

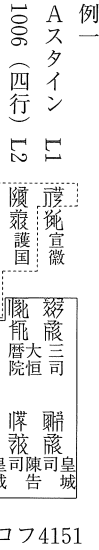
(漢語は筆者が仮に与えたもの、以下同じ) いずれも虹

の漢師詞である。これらの単語は現存するゴズロフ本のいずれにもない。つぎに具体的に埋め込み復元作業の結果を二例に限って示しておく。

西夏文『雑字』は需要が多かったとみえて多種類の版本が残っている。ゴズロフ本に限ってみてもその種類の多さは想像できたけれども、更にスタイン本を勘案するとともに多くの増加本が造られていたと考えざるを得ない。語彙の増加整理に伴って自然に配列順序も移動し、語形の入

替えも行なわれてきた。スタイン本2501の諺諺天乾 諷禱
 白霄 殿熾天聖に対して、ゴズロフ本2505では諺諺天乾 諷
 諷天霄 殿熾天聖が当たっている。
 版型も種々あり、筆者はスタイン本1835+3921を印面天
 地16.1cm左右24cmに復元したが、そのほか2400-2402に代
 表されるような目立って大きい版本もあった。

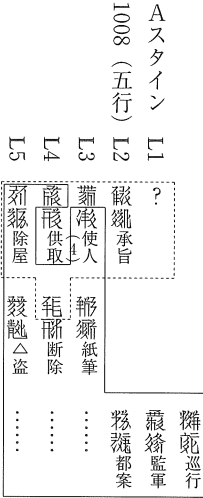
2. 西夏研究の専門家であれば一見してその正体をつかめ



Bゴズロフ4151

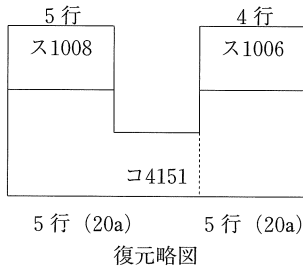
A スタイン1006 (四行) は、B
 ゴズロフ4151 (一四行) の欠所
 に埋まる (20a)

例二



Bゴズロフ4151

A スタイン1008 (五行下部欠)
 はBゴズロフ4151の上部に埋ま
 る (一部は重複する)



復元略図

王仁持校ス 序ニ曰ク 今道理トハ 人祖神ノ往昔ノ
言説ヨリ 今ニ至ル妙句ヲ流伝セルモノナリ。 千々
ノ諸部ハ儀式ヲ捨テズ 万々ノ庶民モ道理ヲ捨テラレ
ズ。 是ノ如ク搜シ信ズルト雖モ 句ノ数ハ多ク有り。

諸本ノ中ニハ序ヲ送スルニヨリ説者ノ句義中ラズ
体ト文ヲ俱ニスルコト少シ。 其レニヨリ徳育ハ諸文中
ニ種事ヲ引キタル辞弁ノ句ヲ搜シ諸義ノ綱ニ随イ語詞
ヲ案撰シタリ。 句ト句ハ相受ケ智者ノ道ヲ説キ 文ト
文ハ調和シテ愚蒙ニ礼ヲ演ベル。 是ノ如ク種義諸事ヲ
説クトコロノ道理ノ(本)体ハ略已ニ集メタレド首尾
未ダ具セザルニ徳育寿ヲ終エ死ニ至ル。 是ノ本ソレニ
ヨリ暗ニ置カレタルガ今、仁持先ニ対(句?)…後ニ
俗界ノ利益ト成ルヲ望ム故ニ、首尾ヲ調エ序ヲ記シ具
セシメ、世間ニ雕印伝布セントス。 謀ヲ含ムモノニ非
ズ智者ハ悪言スルコト勿レ。

4. 3087③p.354を編者は諺語とするが勿論『錦合道理』
の中に該当する文句はない。表題の二字が残っていて「……
病来」と読める。つぎのような内容を記しているが諺語と
は言い難い。

- 一、東ノ河川ヨリ水ノ病ハ来ル
- 二、西ノ河川ヨリ風ノ病ハ来ル

批評と紹介 西田

- 三、其ノ障害ヨリ離別セヨ汝ハ
- 四、頭髮千條何ゾ疾病ナル

仏経の裏面に書かれたものらしい。いまのところそれに
該当するコズロフ本は判明していない。

5. つぎに同じ經典の西夏語訳であり、しかも共に黒水
城出土本でありながら、スタイン本とコズロフ本で版本が
相違する例を若干あげておきたい。

2525RV (③p.137上右) は下半部十二行を残す断片であ
るが、提婆達多品第十二と記されているから、『法華経』
巻五の残片であることは間違いない。事実コズロフ本巻五
Z067 (刊本) と一致する(筆者の編集本、『西夏文』「妙法
蓮華経」写真版) 創備学会刊、二〇〇三、六八頁)。しか
しコズロフ本は経題のあとに三代皇帝惠宗と皇太后梁氏賢
訳と明記されているが、このスタイン断片にはその二行に
替わって奉天顕道：惇睦懿恭皇帝賢校とあって、仁宗の校
訂本であること、つまり両者は別の版本であることを明らか
かに示している。因にコズロフ収集の中でも巻六Z0783
(刊本) は惠宗と皇太后の訳とあり、719 (抄本) には仁宗
校とのみ書かれている。

6. 2941 (③p.289下左) は僅か五行を残す断片である

第八十八卷 四二七

が経題の一部を含んでいて、『聖観自在大悲心總持功德經
依集』（編者は…依経録と訳している）と同定するのは正
しい。

経題は梵語…夏語…と対照して記され明らかに藏文經典
からの訳文である。梵文タイトルを音写した三行の中、は
じめの二行を欠いていて、つぎの下線にあたる部分のみが
残っている。 *Mahākāraṇika-nāma ārya avakṣite śvara-dhara-*
nī amuṣaṇi/sa-sauṇa-suhāi sanḡhīā コズロフ本にも同種の
經典があつて (TG83 No.6881) 右記の梵字音写三行の中 *a*
valokite 以降に当る二行が残っている。しかも三行目は *雜*
雜 蕩 翻 ……となつておりスタイン本の前行末に置かれた
ṣ が三行目の頭初に移動している。共に刊本であつたが
異つた版であることは間違いない。 *sangriā* の音写につ
いて一言述べておきたい。両本共に *雜* 翻 蕩 翻 *sanḡin* *hi-*
xīfān → *sanḡriā* と音写するが二字目は疑母平声三十二
韻で *gin* と再構すべきことがわかる。

なお2941と全く同一の断片を、2997RV (③p.312上左)
に下部が切れた形で、更に3000 (③p.313下右)に番号を
変えて三度掲げているのは、手違いであらうか。

7. 3082 (③p.349) は「仏説父母恩重經」と同定して
いる。コズロフ本にも同じ經典(疑経)が数種類あつて、

759は蝴蝶裝刊本(十二葉)で天盛壬申四年(1157)五月
日施と紀年されるが経題の部分に欠く。687は一葉のみで
左側に仏画が置かれ右側に経題があるものの校訂者の行が
縮んでいてよく読み取れない。それ故明確に仁宗の称号が
書かれたこのスタイン本は断片ではあるが、貴重と言える。
おそらくコズロフ686とスタイン3082は同一の版本による
ものであらう(半番六行。一行十二字詰)。

8. 2109 (②p.336) は仏経経頌と指示しているが、実
は『金光明最勝王経』卷四の断片である。筆者の調査ノー
トにはその続きとして2109裏が記録されているが、本書に
は収録されていない。『金光明最勝王経』と言えば一九三
三年に刊行された王静如の研究がよく知られている。王静
如は北京図書館所蔵の西夏文を基にした。この断片は王静
如『西夏研究』第二輯所載の西夏文一九二頁に該当するが、
両者はかなり相違している。傍線で示す。

2109	12 𑖀𑖂𑖄𑖆𑖈𑖊𑖌𑖎𑖐𑖒𑖔𑖖𑖘𑖚𑖜𑖞𑖠𑖢𑖣𑖤𑖥𑖦𑖧𑖨𑖩𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮𑖯𑖰𑖱𑖲𑖳𑖴𑖵𑖶𑖷𑖸𑖹𑖺𑖻𑖼𑖽𑖾𑗀𑖿𑗁𑗂𑗃𑗄𑗅𑗆𑗇𑗈𑗉𑗊𑗋𑗌𑗍𑗎𑗏𑗐𑗑𑗒𑗓𑗔𑗕𑗖𑗗𑗘𑗙𑗚𑗛𑗜𑗝𑗞𑗟𑗠𑗡𑗢𑗣𑗤𑗥𑗦𑗧𑗨𑗩𑗪𑗫𑗬𑗭𑗮𑗯𑗰𑗱𑗲𑗳𑗴𑗵𑗶𑗷𑗸𑗹𑗺𑗻𑗼𑗽𑗾𑗿𑘀𑘁𑘂𑘃𑘄𑘅𑘆𑘇𑘈𑘉𑘊𑘋𑘌𑘍𑘎𑘏𑘐𑘑𑘒𑘓𑘔𑘕𑘖𑘗𑘘𑘙𑘚𑘛𑘜𑘝𑘞𑘟𑘠𑘡𑘢𑘣𑘤𑘥𑘦𑘧𑘨𑘩𑘪𑘫𑘬𑘭𑘮𑘯𑘰𑘱𑘲𑘳𑘴𑘵𑘶𑘷𑘸𑘹𑘺𑘻𑘼𑘽𑘾𑘿𑙀𑙁𑙂𑙃𑙄𑙅𑙆𑙇𑙈𑙉𑙊𑙋𑙌𑙍𑙎𑙏𑙐𑙑𑙒𑙓𑙔𑙕𑙖𑙗𑙘𑙙𑙚𑙛𑙜𑙝𑙞𑙟𑙠𑙡𑙢𑙣𑙤𑙥𑙦𑙧𑙨𑙩𑙪𑙫𑙬𑙭𑙮𑙯𑙰𑙱𑙲𑙳𑙴𑙵𑙶𑙷𑙸𑙹𑙺𑙻𑙼𑙽𑙾𑙿𑚀𑚁𑚂𑚃𑚄𑚅𑚆𑚇𑚈𑚉𑚊𑚋𑚌𑚍𑚎𑚏𑚐𑚑𑚒𑚓𑚔𑚕𑚖𑚗𑚘𑚙𑚚𑚛𑚜𑚝𑚞𑚟𑚠𑚡𑚢𑚣𑚤𑚥𑚦𑚧𑚨𑚩𑚪𑚫𑚬𑚭𑚮𑚯𑚰𑚱𑚲𑚳𑚴𑚵𑚷𑚶𑚸𑚹𑚺𑚻𑚼𑚽𑚾𑚿𑛀𑛁𑛂𑛃𑛄𑛅𑛆𑛇𑛈𑛉𑛊𑛋𑛌𑛍𑛎𑛏𑛐𑛑𑛒𑛓𑛔𑛕𑛖𑛗𑛘𑛙𑛚𑛛𑛜𑛝𑛞𑛟𑛠𑛡𑛢𑛣𑛤𑛥𑛦𑛧𑛨𑛩𑛪𑛫𑛬𑛭𑛮𑛯𑛰𑛱𑛲𑛳𑛴𑛵𑛶𑛷𑛸𑛹𑛺𑛻𑛼𑛽𑛾𑛿𑜀𑜁𑜂𑜃𑜄𑜅𑜆𑜇𑜈𑜉𑜊𑜋𑜌𑜍𑜎𑜏𑜐𑜑𑜒𑜓𑜔𑜕𑜖𑜗𑜘𑜙𑜚𑜛𑜜𑜝𑜞𑜟𑜠𑜡𑜢𑜣𑜤𑜥𑜦𑜧𑜨𑜩𑜪𑜫𑜬𑜭𑜮𑜯𑜰𑜱𑜲𑜳𑜴𑜵𑜶𑜷𑜸𑜹𑜺𑜻𑜼𑜽𑜾𑜿𑝀𑝁𑝂𑝃𑝄𑝅𑝆𑝇𑝈𑝉𑝊𑝋𑝌𑝍𑝎𑝏𑝐𑝑𑝒𑝓𑝔𑝕𑝖𑝗𑝘𑝙𑝚𑝛𑝜𑝝𑝞𑝟𑝠𑝡𑝢𑝣𑝤𑝥𑝦𑝧𑝨𑝩𑝪𑝫𑝬𑝭𑝮𑝯𑝰𑝱𑝲𑝳𑝴𑝵𑝶𑝷𑝸𑝹𑝺𑝻𑝼𑝽𑝾𑝿𑞀𑞁𑞂𑞃𑞄𑞅𑞆𑞇𑞈𑞉𑞊𑞋𑞌𑞍𑞎𑞏𑞐𑞑𑞒𑞓𑞔𑞕𑞖𑞗𑞘𑞙𑞚𑞛𑞜𑞝𑞞𑞟𑞠𑞡𑞢𑞣𑞤𑞥𑞦𑞧𑞨𑞩𑞪𑞫𑞬𑞭𑞮𑞯𑞰𑞱𑞲𑞳𑞴𑞵𑞶𑞷𑞸𑞹𑞺𑞻𑞼𑞽𑞾𑞿𑟀𑟁𑟂𑟃𑟄𑟅𑟆𑟇𑟈𑟉𑟊𑟋𑟌𑟍𑟎𑟏𑟐𑟑𑟒𑟓𑟔𑟕𑟖𑟗𑟘𑟙𑟚𑟛𑟜𑟝𑟞𑟟𑟠𑟡𑟢𑟣𑟤𑟥𑟦𑟧𑟨𑟩𑟪𑟫𑟬𑟭𑟮𑟯𑟰𑟱𑟲𑟳𑟴𑟵𑟶𑟷𑟸𑟹𑟺𑟻𑟼𑟽𑟾𑟿𑠀𑠁𑠂𑠃𑠄𑠅𑠆𑠇𑠈𑠉𑠊𑠋𑠌𑠍𑠎𑠏𑠐𑠑𑠒𑠓𑠔𑠕𑠖𑠗𑠘𑠙𑠚𑠛𑠜𑠝𑠞𑠟𑠠𑠡𑠢𑠣𑠤𑠥𑠦𑠧𑠨𑠩𑠪𑠫𑠬𑠭𑠮𑠯𑠰𑠱𑠲𑠳𑠴𑠵𑠶𑠷𑠸𑠺𑠹𑠻𑠼𑠽𑠾𑠿𑡀𑡁𑡂𑡃𑡄𑡅𑡆𑡇𑡈𑡉𑡊𑡋𑡌𑡍𑡎𑡏𑡐𑡑𑡒𑡓𑡔𑡕𑡖𑡗𑡘𑡙𑡚𑡛𑡜𑡝𑡞𑡟𑡠𑡡𑡢𑡣𑡤𑡥𑡦𑡧𑡨𑡩𑡪𑡫𑡬𑡭𑡮𑡯𑡰𑡱𑡲𑡳𑡴𑡵𑡶𑡷𑡸𑡹𑡺𑡻𑡼𑡽𑡾𑡿𑢀𑢁𑢂𑢃𑢄𑢅𑢆𑢇𑢈𑢉𑢊𑢋𑢌𑢍𑢎𑢏𑢐𑢑𑢒𑢓𑢔𑢕𑢖𑢗𑢘𑢙𑢚𑢛𑢜𑢝𑢞𑢟𑢠𑢡𑢢𑢣𑢤𑢥𑢦𑢧𑢨𑢩𑢪𑢫𑢬𑢭𑢮𑢯𑢰𑢱𑢲𑢳𑢴𑢵𑢶𑢷𑢸𑢹𑢺𑢻𑢼𑢽𑢾𑢿𑣀𑣁𑣂𑣃𑣄𑣅𑣆𑣇𑣈𑣉𑣊𑣋𑣌𑣍𑣎𑣏𑣐𑣑𑣒𑣓𑣔𑣕𑣖𑣗𑣘𑣙𑣚𑣛𑣜𑣝𑣞𑣟𑣠𑣡𑣢𑣣𑣤𑣥𑣦𑣧𑣨𑣩𑣪𑣫𑣬𑣭𑣮𑣯𑣰𑣱𑣲𑣳𑣴𑣵𑣶𑣷𑣸𑣹𑣺𑣻𑣼𑣽𑣾𑣿𑤀𑤁𑤂𑤃𑤄𑤅𑤆𑤇𑤈𑤉𑤊𑤋𑤌𑤍𑤎𑤏𑤐𑤑𑤒𑤓𑤔𑤕𑤖𑤗𑤘𑤙𑤚𑤛𑤜𑤝𑤞𑤟𑤠𑤡𑤢𑤣𑤤𑤥𑤦𑤧𑤨𑤩𑤪𑤫𑤬𑤭𑤮𑤯𑤰𑤱𑤲𑤳𑤴𑤵𑤶𑤷𑤸𑤹𑤺𑤻𑤼𑤽𑤾𑤿𑥀𑥁𑥂𑥃𑥄𑥅𑥆𑥇𑥈𑥉𑥊𑥋𑥌𑥍𑥎𑥏𑥐𑥑𑥒𑥓𑥔𑥕𑥖𑥗𑥘𑥙𑥚𑥛𑥜𑥝𑥞𑥟𑥠𑥡𑥢𑥣𑥤𑥥𑥦𑥧𑥨𑥩𑥪𑥫𑥬𑥭𑥮𑥯𑥰𑥱𑥲𑥳𑥴𑥵𑥶𑥷𑥸𑥹𑥺𑥻𑥼𑥽𑥾𑥿𑦀𑦁𑦂𑦃𑦄𑦅𑦆𑦇𑦈𑦉𑦊𑦋𑦌𑦍𑦎𑦏𑦐𑦑𑦒𑦓𑦔𑦕𑦖𑦗𑦘𑦙𑦚𑦛𑦜𑦝𑦞𑦟𑦠𑦡𑦢𑦣𑦤𑦥𑦦𑦧𑦨𑦩𑦪𑦫𑦬𑦭𑦮𑦯𑦰𑦱𑦲𑦳𑦴𑦵𑦶𑦷𑦸𑦹𑦺𑦻𑦼𑦽𑦾𑦿𑧀𑧁𑧂𑧃𑧄𑧅𑧆𑧇𑧈𑧉𑧊𑧋𑧌𑧍𑧎𑧏𑧐𑧑𑧒𑧓𑧔𑧕𑧖𑧗𑧘𑧙𑧚𑧛𑧜𑧝𑧞𑧟𑧠𑧡𑧢𑧣𑧤𑧥𑧦𑧧𑧨𑧩𑧪𑧫𑧬𑧭𑧮𑧯𑧰𑧱𑧲𑧳𑧴𑧵𑧶𑧷𑧸𑧹𑧺𑧻𑧼𑧽𑧾𑧿𑨀𑨁𑨂𑨃𑨄𑨅𑨆𑨇𑨈𑨉𑨊𑨋𑨌𑨍𑨎𑨏𑨐𑨑𑨒𑨓𑨔𑨕𑨖𑨗𑨘𑨙𑨚𑨛𑨜𑨝𑨞𑨟𑨠𑨡𑨢𑨣𑨤𑨥𑨦𑨧𑨨𑨩𑨪𑨫𑨬𑨭𑨮𑨯𑨰𑨱𑨲𑨳𑨴𑨵𑨶𑨷𑨸𑨹𑨺𑨻𑨼𑨽𑨾𑨿𑩀𑩁𑩂𑩃𑩄𑩅𑩆𑩇𑩈𑩉𑩊𑩋𑩌𑩍𑩎𑩏𑩐𑩑𑩒𑩓𑩔𑩕𑩖𑩗𑩘𑩙𑩚𑩛𑩜𑩝𑩞𑩟𑩠𑩡𑩢𑩣𑩤𑩥𑩦𑩧𑩨𑩩𑩪𑩫𑩬𑩭𑩮𑩯𑩰𑩱𑩲𑩳𑩴𑩵𑩶𑩷𑩸𑩹𑩺𑩻𑩼𑩽𑩾𑩿𑪀𑪁𑪂𑪃𑪄𑪅𑪆𑪇𑪈𑪉𑪊𑪋𑪌𑪍𑪎𑪏𑪐𑪑𑪒𑪓𑪔𑪕𑪖𑪗𑪘𑪙𑪚𑪛𑪜𑪝𑪞𑪟𑪠𑪡𑪢𑪣𑪤𑪥𑪦𑪧𑪨𑪩𑪪𑪫𑪬𑪭𑪮𑪯𑪰𑪱𑪲𑪳𑪴𑪵𑪶𑪷𑪸𑪹𑪺𑪻𑪼𑪽𑪾𑪿𑫀𑫁𑫂𑫃𑫄𑫅𑫆𑫇𑫈𑫉𑫊𑫋𑫌𑫍𑫎𑫏𑫐𑫑𑫒𑫓𑫔𑫕𑫖𑫗𑫘𑫙𑫚𑫛𑫜𑫝𑫞𑫟𑫠𑫡𑫢𑫣𑫤𑫥𑫦𑫧𑫨𑫩𑫪𑫫𑫬𑫭𑫮𑫯𑫰𑫱𑫲𑫳𑫴𑫵𑫶𑫷𑫸𑫹𑫺𑫻𑫼𑫽𑫾𑫿𑬀𑬁𑬂𑬃𑬄𑬅𑬆𑬇𑬈𑬉𑬊𑬋𑬌𑬍𑬎𑬏𑬐𑬑𑬒𑬓𑬔𑬕𑬖𑬗𑬘𑬙𑬚𑬛𑬜𑬝𑬞𑬟𑬠𑬡𑬢𑬣𑬤𑬥𑬦𑬧𑬨𑬩𑬪𑬫𑬬𑬭𑬮𑬯𑬰𑬱𑬲𑬳𑬴𑬵𑬶𑬷𑬸𑬹𑬺𑬻𑬼𑬽𑬾𑬿𑭀𑭁𑭂𑭃𑭄𑭅𑭆𑭇𑭈𑭉𑭊𑭋𑭌𑭍𑭎𑭏𑭐𑭑𑭒𑭓𑭔𑭕𑭖𑭗𑭘𑭙𑭚𑭛𑭜𑭝𑭞𑭟𑭠𑭡𑭢𑭣𑭤𑭥𑭦𑭧𑭨𑭩𑭪𑭫𑭬𑭭𑭮𑭯𑭰𑭱𑭲𑭳𑭴𑭵𑭶𑭷𑭸𑭹𑭺𑭻𑭼𑭽𑭾𑭿𑮀𑮁𑮂𑮃𑮄𑮅𑮆𑮇𑮈𑮉𑮊𑮋𑮌𑮍𑮎𑮏𑮐𑮑𑮒𑮓𑮔𑮕𑮖𑮗𑮘𑮙𑮚𑮛𑮜𑮝𑮞𑮟𑮠𑮡𑮢𑮣𑮤𑮥𑮦𑮧𑮨𑮩𑮪𑮫𑮬𑮭𑮮𑮯𑮰𑮱𑮲𑮳𑮴𑮵𑮶𑮷𑮸𑮹𑮺𑮻𑮼𑮽𑮾𑮿𑯀𑯁𑯂𑯃𑯄𑯅𑯆𑯇𑯈𑯉𑯊𑯋𑯌𑯍𑯎𑯏𑯐𑯑𑯒𑯓𑯔𑯕𑯖𑯗𑯘𑯙𑯚𑯛𑯜𑯝𑯞𑯟𑯠𑯡𑯢𑯣𑯤𑯥𑯦𑯧𑯨𑯩𑯪𑯫𑯬𑯭𑯮𑯯𑯰𑯱𑯲𑯳𑯴𑯵𑯶𑯷𑯸𑯹𑯺𑯻𑯼𑯽𑯾𑯿𑰀𑰁𑰂𑰃𑰄𑰅𑰆𑰇𑰈𑰉𑰊𑰋𑰌𑰍𑰎𑰏𑰐𑰑𑰒𑰓𑰔𑰕𑰖𑰗𑰘𑰙𑰚𑰛𑰜𑰝𑰞𑰟𑰠𑰡𑰢𑰣𑰤𑰥𑰦𑰧𑰨𑰩𑰪𑰫𑰬𑰭𑰮𑰯𑰰𑰱𑰲𑰳𑰴𑰵𑰶𑰷𑰸𑰹𑰺𑰻𑰼𑰽𑰾𑰿𑱀𑱁𑱂𑱃𑱄𑱅𑱆𑱇𑱈𑱉𑱊𑱋𑱌𑱍𑱎𑱏𑱐𑱑𑱒𑱓𑱔𑱕𑱖𑱗𑱘𑱙𑱚𑱛𑱜𑱝𑱞𑱟𑱠𑱡𑱢𑱣𑱤𑱥𑱦𑱧𑱨𑱩𑱪𑱫𑱬𑱭𑱮𑱯𑱰𑱱𑱲𑱳𑱴𑱵𑱶𑱷𑱸𑱹𑱺𑱻𑱼𑱽𑱾𑱿𑲀𑲁𑲂𑲃𑲄𑲅𑲆𑲇𑲈𑲉𑲊𑲋𑲌𑲍𑲎𑲏𑲐𑲑𑲒𑲓𑲔𑲕𑲖𑲗𑲘𑲙𑲚𑲛𑲜𑲝𑲞𑲟𑲠𑲡𑲢𑲣𑲤𑲥𑲦𑲧𑲨𑲩𑲪𑲫𑲬𑲭𑲮𑲯𑲰𑲱𑲲𑲳𑲴𑲵𑲶𑲷𑲸𑲹𑲺𑲻𑲼𑲽𑲾𑲿𑳀𑳁𑳂𑳃𑳄𑳅𑳆𑳇𑳈𑳉𑳊𑳋𑳌𑳍𑳎𑳏𑳐𑳑𑳒𑳓𑳔𑳕𑳖𑳗𑳘𑳙𑳚𑳛𑳜𑳝𑳞𑳟𑳠𑳡𑳢𑳣𑳤𑳥𑳦𑳧𑳨𑳩𑳪𑳫𑳬𑳭𑳮𑳯𑳰𑳱𑳲𑳳𑳴𑳵𑳶𑳷𑳸𑳹𑳺𑳻𑳼𑳽𑳾𑳿𑴀𑴁𑴂𑴃𑴄𑴅𑴆𑴇𑴈𑴉𑴊𑴋𑴌𑴍𑴎𑴏𑴐𑴑𑴒𑴓𑴔𑴕𑴖𑴗𑴘𑴙𑴚𑴛𑴜𑴝𑴞𑴟𑴠𑴡𑴢𑴣𑴤𑴥𑴦𑴧𑴨𑴩𑴪𑴫𑴬𑴭𑴮𑴯𑴰𑴱𑴲𑴳𑴴𑴵𑴶𑴷𑴸𑴹𑴺𑴻𑴼𑴽𑴾𑴿𑵀𑵁𑵂𑵃𑵄𑵅𑵆𑵇𑵈𑵉𑵊𑵋𑵌𑵍𑵎𑵏𑵐𑵑𑵒𑵓𑵔𑵕𑵖𑵗𑵘𑵙𑵚𑵛𑵜𑵝𑵞𑵟𑵠𑵡𑵢𑵣𑵤𑵥𑵦𑵧𑵨𑵩𑵪𑵫𑵬𑵭𑵮𑵯𑵰𑵱𑵲𑵳𑵴𑵵𑵶𑵷𑵸𑵹𑵺𑵻𑵼𑵽𑵾𑵿𑶀𑶁𑶂𑶃𑶄𑶅𑶆𑶇𑶈𑶉𑶊𑶋𑶌𑶍𑶎𑶏𑶐𑶑𑶒𑶓𑶔𑶕𑶖𑶗𑶘𑶙𑶚𑶛𑶜𑶝𑶞𑶟𑶠𑶡𑶢𑶣𑶤𑶥𑶦𑶧𑶨𑶩𑶪𑶫𑶬𑶭𑶮𑶯𑶰𑶱𑶲𑶳𑶴𑶵𑶶𑶷𑶸𑶹𑶺𑶻𑶼𑶽𑶾𑶿𑷀𑷁𑷂𑷃𑷄𑷅𑷆𑷇𑷈𑷉𑷊𑷋𑷌𑷍𑷎𑷏𑷐𑷑𑷒𑷓𑷔𑷕𑷖𑷗𑷘𑷙𑷚𑷛𑷜𑷝𑷞𑷟𑷠𑷡𑷢𑷣𑷤𑷥𑷦𑷧𑷨𑷩𑷪𑷫𑷬𑷭𑷮𑷯𑷰𑷱𑷲𑷳𑷴𑷵𑷶𑷷𑷸𑷹𑷺𑷻𑷼𑷽𑷾𑷿𑸀𑸁𑸂𑸃𑸄𑸅𑸆𑸇𑸈𑸉𑸊𑸋𑸌𑸍𑸎𑸏𑸐𑸑𑸒𑸓𑸔𑸕𑸖𑸗𑸘𑸙𑸚𑸛𑸜𑸝𑸞𑸟𑸠𑸡𑸢𑸣𑸤𑸥𑸦𑸧𑸨𑸩𑸪𑸫𑸬𑸭𑸮𑸯𑸰𑸱𑸲𑸳𑸴𑸵𑸶𑸷𑸸𑸹𑸺𑸻𑸼𑸽𑸾𑸿𑹀𑹁𑹂𑹃𑹄𑹅𑹆𑹇𑹈𑹉𑹊𑹋𑹌𑹍𑹎𑹏𑹐𑹑𑹒𑹓𑹔𑹕𑹖𑹗𑹘𑹙𑹚𑹛𑹜𑹝𑹞𑹟𑹠𑹡𑹢𑹣𑹤𑹥𑹦𑹧𑹨𑹩𑹪𑹫𑹬𑹭𑹮𑹯𑹰𑹱𑹲𑹳𑹴𑹵𑹶𑹷𑹸𑹹𑹺𑹻𑹼𑹽𑹾𑹿𑺀𑺁𑺂𑺃𑺄𑺅𑺆𑺇𑺈𑺉𑺊𑺋𑺌𑺍𑺎𑺏𑺐𑺑𑺒𑺓𑺔𑺕𑺖𑺗𑺘𑺙𑺚𑺛𑺜𑺝𑺞𑺟𑺠𑺡𑺢𑺣𑺤𑺥𑺦𑺧𑺨𑺩𑺪𑺫𑺬𑺭𑺮𑺯𑺰𑺱𑺲𑺳𑺴𑺵𑺶𑺷𑺸𑺹𑺺𑺻𑺼𑺽𑺾𑺿𑻀𑻁𑻂𑻃𑻄𑻅𑻆𑻇𑻈𑻉𑻊𑻋𑻌𑻍𑻎𑻏𑻐𑻑𑻒𑻓𑻔𑻕𑻖𑻗𑻘𑻙𑻚𑻛𑻜𑻝𑻞𑻟𑻠𑻡𑻢𑻣𑻤𑻥𑻦𑻧𑻨𑻩𑻪𑻫𑻬𑻭𑻮𑻯𑻰𑻱𑻲𑻳𑻴𑻵𑻶𑻷𑻸𑻹𑻺𑻻𑻼𑻽𑻾𑻿𑼀𑼁𑼂𑼃𑼄𑼅𑼆𑼇𑼈𑼉𑼊𑼋𑼌𑼍𑼎𑼏𑼐𑼑𑼒𑼓𑼔𑼕𑼖𑼗𑼘𑼙𑼚𑼛𑼜𑼝𑼞𑼟𑼠𑼡𑼢𑼣𑼤𑼥𑼦𑼧𑼨𑼩𑼪𑼫𑼬𑼭𑼮𑼯𑼰𑼱𑼲𑼳𑼴𑼵𑼶𑼷𑼸𑼹𑼺𑼻𑼼𑼽𑼾𑼿𑽀𑽁𑽂𑽃𑽄𑽅𑽆𑽇𑽈𑽉𑽊𑽋𑽌𑽍𑽎𑽏𑽐𑽑𑽒𑽓𑽔𑽕𑽖𑽗𑽘𑽙𑽚𑽛𑽜𑽝𑽞𑽟𑽠𑽡𑽢𑽣𑽤𑽥𑽦𑽧𑽨𑽩𑽪𑽫𑽬𑽭𑽮𑽯𑽰𑽱𑽲𑽳𑽴𑽵𑽶𑽷𑽸𑽹𑽺𑽻𑽼𑽽𑽾𑽿𑾀𑾁𑾂𑾃𑾄𑾅𑾆𑾇𑾈𑾉𑾊𑾋𑾌𑾍𑾎𑾏𑾐𑾑𑾒𑾓𑾔𑾕𑾖𑾗𑾘𑾙𑾚𑾛𑾜𑾝𑾞𑾟𑾠𑾡𑾢𑾣𑾤𑾥𑾦𑾧𑾨𑾩𑾪𑾫𑾬𑾭𑾮𑾯𑾰𑾱𑾲𑾳𑾴𑾵𑾶𑾷𑾸𑾹𑾺𑾻𑾼𑾽𑾾𑾿𑿀𑿁𑿂𑿃𑿄𑿅𑿆𑿇𑿈𑿉𑿊𑿋𑿌𑿍𑿎𑿏𑿐𑿑𑿒𑿓𑿔𑿕𑿖𑿗𑿘𑿙𑿚𑿛𑿜𑿝𑿞𑿟𑿠𑿡𑿢𑿣𑿤𑿥𑿦𑿧𑿨𑿩𑿪𑿫𑿬𑿭𑿮𑿯𑿰𑿱𑿲𑿳𑿴𑿵𑿶𑿷𑿸𑿹𑿺𑿻𑿼𑿽𑿾𑿿𑀀𑀁𑀂𑀃𑀄𑀅𑀆𑀇𑀈𑀉𑀊𑀋𑀌𑀍𑀎𑀏𑀐𑀑𑀒𑀓𑀔𑀕𑀖𑀗𑀘𑀙𑀚𑀛𑀜𑀝𑀞𑀟𑀠𑀡𑀢𑀣𑀤𑀥𑀦𑀧𑀨𑀩𑀪𑀫𑀬𑀭𑀮𑀯𑀰𑀱𑀲𑀳𑀴𑀵𑀶𑀷𑀸𑀹𑀺𑀻𑀼𑀽𑀾𑀿𑁀𑁁𑁂𑁃𑁄𑁅𑁆𑁇𑁈𑁉𑁊𑁋𑁌𑁍𑁎𑁏𑁐𑁑𑁒𑁓𑁔𑁕𑁖𑁗𑁘𑁙𑁚𑁛𑁜𑁝𑁞𑁟𑁠𑁡𑁢𑁣𑁤𑁥𑁦𑁧𑁨𑁩𑁪𑁫𑁬𑁭𑁮𑁯𑁰𑁱𑁲𑁳𑁴𑁵𑁶𑁷
------	--

18 胤胤繡綴 繡符繡綴 為度衆生故

スタイン本は言うまでもなく黒水城から出土したものであるのに対して北京図書館所蔵本は一九一七年に靈武県城壁からの出土品であり、木活字本である可能性が大きい。

『華嚴經』に見られるように活字本を造るに当って、字句の改訂も同時に行なっていたらしい(拙著『西夏文華嚴經』I p.24以下参照)。筆者は拙著『西夏語の研究』IIに於いて(p.293)天理本と北京本の差異にふれたが、それと同じ性質の異同がここにも見られるのである。この事実からも、天理本は靈武県城出土品ではないことが判明する。筆者は天理本は元刊本の残片であると考えている。

9・前回に書いたようにスタイン収集品には金剛般若経の残片が多量に含まれている。大小さまざまの刻本が折本や蝴蝶装本の型をとっておりその整理復元は一つの研究課題となる。本書では版型を示していないが、大別すると次のように分類できる(筆者の調査ノートによる)。

- 一' 2711~2716な_ヤ。13×7cmの小型折本。
- 二' 2937' 3734な_ヤ。17×8.5cmの中型折本。
- 三' 3210' 3742な_ヤ。一よりも天地の長いたて長折本。
- 四' 2967' 3230な_ヤ。18×21cm(片面10.5cm) 蝴蝶装本。

批評と紹介 西田

また分科文も多く残っている。特に『金剛般若経頌』の断片である3042RV' 3040RV' は興味深い。内容はゴズロフ本(TG386' No.7580)と合致するが、版が異っていて、文字の配分が相違するのである。

スタイン 3040RV' (p.330上左右) コズロフ 7580' 103' 104

羽繡 絞符絞 絞繡 (下部欠)

繡繡

羽繡絞符

絞繡

繡符

繡繡

繡符繡繡

繡繡

(下部欠)

確認はないが筆者は版面の奇麗なスタイン本の方が古いのではないかと考えている。しかし何故文字の配分を改めたのかは推測し難い。天地の長さが相違したのかも知れない。金剛経の西夏文には法華経のような複雑な文章は使われていないが、興味ある表現はかなり多く発見できる。以下、七項目にまとめて例示しておきたい。

〔一〕繡_{2a}による疑問文 繡「動詞」概後は随所に使われ常用の表現となっている。たとえば「如来繡_{2a}繡_{2a}見ルヤ否ヤ」。文末に置かれる繡_{2a}(上42)は漢語「耶」に当る。「……繡_{2a}繡_{2a}得ルトコロ無シトセンヤ 為無所得耶(22)」「転輪王モ即チ繡_{2a}繡_{2a}如來ナラン(則是如

第八十八卷 四二九

今の段階では難しく、この小断片の前後関係を決めるのも厄介であるが各片の内容を訳して提示しておきたい。

1480 (p.121上右) 四行残「L1 (欠) 中家人腹腸骨ヲ患フ皮ヲ焼ク (欠) … L2 (欠) 地人□患フ 婦人ハ冷気血 (欠) … L3 鬼ヲ見テ精ヲ失フ夢ヲ見レバ「乾ノ刻ニ頭骨足ヲ (患フ) (欠) … L4 (欠) 患フ「良ノ刻ニ手肉ヲ患フ」時刻? によって患う人体部分を示している。

1481 (②p.121上左) 五行分残る「L1 (欠) 妄ニ傷ケ□人ト離レ財ハ亡ビ小戸ハ死ス (欠) … L2 (欠) 禍ハ家主ニ (及ビ) 眼中ニ瘡ガ出ル。兄弟ハ別離シ家 (欠) … L3 (欠) 家主安ラカナラズ 人ト離レ財ハ亡ビ小戸ハ傷ツク (欠) … L4 (欠) 下女ハ年々患ヒ千里□ (欠) … L5 (欠) 鬼ハ□□入り氣 (欠) …」一家に及ぶ鬼神の禍を述べる。

1482 (②p.121下左) 四行のみ残る「L1 (欠) 未ノ刻ハ肩ヲ患フ 寅申ノ刻ハ□□ヲ患フ 酉ノ「刻」 (欠) … L2 (欠) 戌ノ刻ハ腹ヲ患フ 巳亥ノ刻ハ足ヲ患フ「一節」 L3 (欠) 「二」節動キ脾肺ヲ患ヒ三節動キ腰膝ヲ患フ四 (欠)」「時刻や節 (二十四節) の移動と患う身体部分を示している。寅と申の刻は午前三―四時と午後三―四時、巳と亥の刻は午前一〇―一時と午後一〇―一時とそれぞれ午前と午後の同時刻を指している。

1483 (②p.121下左) 五行を残す。「L1 (欠) □観ノ三丘、

五墓 (欠) L2 (欠) 春、丑ノ (日) ハ五墓也。未ノ (日) ハ (三丘トナル (欠) L3 (欠) 五墓、秋、未ノ (日) ハ三丘トナル、丑ノ (日) ハ五墓トナル。L4 (欠) 冬、巳ノ日ハ五墓トナル。墓ニ入レル者ハ卦ハ乾ノ卦 (欠) L5 (欠) 卦ハ艮ノ卦 (欠) 三丘ト五墓 (日)」、四季と十二支の日による厄日の提示である。

1484 (②p.122上右) 五行残るが初行は不鮮明で読めない。「L2 (欠) 失フ解キ焼ク公語 (猥褻) 讒言 (欠) L3 (欠) 罹リ問フ也 若シ水ガ動クトキ井戸 (欠) L4 犬ガ鳴キ声ヲ出ス。兄弟ハ別離ス (欠) L5 婦人ハ出産シ死ス。小戸ハ患フ (欠)」。公語とは35624にある「公語観法」を指すのであろうか。水星の動きなど星宿の移動と禍の関連を述べているらしい。

1485 (②p.122上左) 六行を残すが初行と最終行は読めない。「L2 怪禍ヲ為ス小戸ハ年々哭声ヲ発シ (欠) L3 禍アリ金銀ハ尽キ財ハ減ジ貧窮トナル (欠) L4 意ヲ説キ土ニ属スル (者) 秋季ニハ隆昌ノ意ヲ説ク (欠) L5 (欠) 家主 (小) 戸ノ子ハ遠クニ有リ (欠)」「家主と小戸 (小作人) にかかる禍を述べる。

1487 (②p.122下左) 六行残るが初行と最終行は不鮮明。「L2 (欠) 財産ヲ戸ヨリ盗ミ運ブ三兄弟 (欠) L3 (欠) 等ハ南方ニ隠レ北東ニ運ビ城ノ地下ニ (欠) L4 (欠) 動ク

トキ「庭」園ノ樹ヲ婿ガ盗ミ西北(欠)「5」離別セル兄弟未夕和(合)セズ家主安ラカナラズ(欠)「盗賊と盗難品の行方方位を示している。

以上1480-87全体は④pp.250—251に収まる四枚(352)と連続する内容をもつことは確かと思えるが、両者を順序付ける作業は困難である。コズロフ本の中にも同一乃至は類似した文献はまだ見付かっていない。

11. 医薬書の残巻も数点ある。中でも2499(④p.199下右)は、前後が切れ七行のみの残片であるが目立っている。途中に激しく崩した文字も混じるが、全体は美しく整った行書体で書かれている。名前の分からない薬と齧齧齧(梵和丸仮名)の二種の丸薬について、その調合法(前半は欠ける)、用法、用量効能を記したもので興味深い。詳細についてはいま触れない。編者は2352と2458bも医方とするがその根拠は筆者にはわからない。

12. 中には特徴のある語形を記録する断片に出会うこともある。たとえば「金剛王能断摧之功徳中…」という尾題をもつ2601には叢叢…叢叢 shō-shō (平57)を重ねて「或いは…或いは…」を表現している。これは某部族口語の形式を反映したものであろう。

13. 以上述べたようにスタイン本には結構多種類の文献が混在していて、星宿崇拝と関係する断片(1796)はごめ、ほかにも予想を越えた内容を伝える資料が隠れている可能性がある。最後に一つ重要な文献「呂惠卿注本孝経序」の訳文の一部がその中に現存することを付け加えておきたい(3576)。すでに筆者は『西夏王国の言語と文化』の中で(pp.337-8)紹介したが、紹承二年七月の年号から始まる僅か六行分の小断片に過ぎないが、草書写本のコズロフ本に比べて楷書体で書かれているのは有り難い。

英国蔵黒水城文献が本書のような体裁で提供されるのは最良とは言えないかも知れないが、既刊四巻の中に全面的に公開されたことは誠に有難い。より長い文献を納める巻五の早期出現を期待している。

②二〇〇五年三月、③七月、④八月、上海古籍出版社、上海。B4判。②三五二頁、③三六二頁、④三七二頁)

(二〇〇六年七月一四日受理)

註

(1) 西田龍雄評『英蔵黒水城文献①』『東洋学報』八七巻三号、二〇〇五。

(2) 西田龍雄「西夏語研究と法華経」(Ⅲ)『東洋学術研

究』四五卷一号、東洋哲学研究所、二〇〇六、p. 266。

(3) 西田龍雄上掲 (2) 論文 pp. 266—。

(4) 「供取」は逐語訳であるが、『天盛旧改新定律令』の中国語訳では、この二字に「無期」または「終身」の訳語を与えている。史金波等訳『天盛改旧新定律令』法律出版社、二〇〇〇、北京。

(5) 王の字はコズロフ本序にはないが、スタイン本には入っている。

(6) 『西夏文錦合道理』については、松沢博『新集錦合道理』について、『小野勝年博士頌寿記念東方学論集』一九八二、及び上掲拙論『西夏語研究と法華経』(Ⅲ) p. 258と註(44)を見られたい。

(7) 西夏語の変調現象と筆者の双生字論については、上掲拙論『西夏語研究と法華経』(Ⅱ) 四四卷二号、二〇〇五、p. 201と「付記I」および(Ⅳ) 四五卷二号、二〇〇六を参照されたい。

※西夏文字フォントは『今昔文字鏡』を使った。